

愛の手紙としての説教、そして教会

相馬伸郎

まえおき¹

『福音主義神学』17号、特集「釈義と説教」において、丸山忠孝氏は第三回神学研究会議（1985年）の総評を行った。主題は、「福音主義の聖書解釈と説教」であり、「聖書解釈・釈義から説教へ」が扱われた。その第三分科会の主題は、「釈義から説教における教会の位置づけ」とされた。しかし、発題者の二人とも、「主題そのものが不適切であるとして、泉田氏は、『教会における釈義と説教の位置づけ』と改題し、鷹取氏は、『教会を生活の座に持つ説教』とした。泉田氏は、『教会との健全な関係を失った説教は、説教者の独善と独語に終わってしまう』とし、鷹取氏は、『説教がいかにしたら『教会的』でありうるかを問うた』」（84頁）とある。25年前、ようやく福音派の中でも、「説教の教会的性格・本質」についての議論が出、認識が深められたのである。今回の研究会議は、どれだけこの基本認識²の上に立ち、これを深めると同時に広げることができるのかが根本的に問われ求められよう。

¹ この論考は、「講演」のために準備した原稿を若干整理、小見出しをつけただけのものである。論文の体裁に、との編集者からのお求めであったが、諸般の事情でかなわなかった。心からお詫び申し上げる。

² 地方教会の平凡な牧師である筆者が、前回の第12回全国研究会議（『福音主義神学』第40号、特集「伝道」）に続き発題をお引き受けしたのは、「説教」（説教の使信を教会外に向けて広げる伝道も含む）こそは、福音主義神学の究極の目標であり、しかもこれを主の日ごと担うのは、牧師に他ならないと考えるからである。さらに、これは、ひとり説教者（牧師）個人の課題ではなく、全信徒、つまり教

I. 説教の本質（「何を語るのか」）をめぐる研究会議のためのテーゼ

A 聖書と説教との相互関係

- a 神は、教会に、靈感された神の言葉（本質）である聖書（文書啓示）を与え、正典（教会の信仰と生活を規範する唯一の規範）として信じ認めさせられた。したがって今や、説教のことばの源泉は、この正典文書のみである。
- b 預言者にして神の生ける言葉なるイエス・キリストは、今も、聖書を通し、父なる神の御心であるみ言葉を語り続けておられる。彼は、ご自身の体なる教会を通してそれを遂行しておられる。したがって、教会の説教の中心的課題とは、このイエス・キリストにおける預言者職を継承し、主イエスご自身を指し示すことである。

B 聖書・信条・教会と説教との相互関係

- a 神は、御言葉の下に神の民である教会を招集される。教会は、聖書において語られる聖霊によって御言葉を聴き続ける。教会は、神の語りとしての説教に服従することによって絶えず形成（改革）される。御言葉に基礎づけられる教会は、教会の頭なる方から、「あなたはわたしを誰というのか」と、信仰を告白することへと常に呼び出される。
- b 従って教会は第一に、聖書の信仰（教説）を把握し、告白し、賛美、礼拝することへと促される。教会によって告白された信条は、聖書によって規範される第二の規範として教会の実践を拘束する。ニカイア、カルケドン、使徒信条等の基本信条によって、公同教会の自己理解は確立され、全教会間と各個教会内における信仰の一致は保持される。
- c 改革された教会は、基本信条を展開し、各々の信仰告白を新たに生産した。教会は、これら信仰告白文書において、説教者をして恣意的解釈や独善的

会共同体の課題であり務めでもあると考えるからである。前回の応答、再応答における議論は、残念ながらかみ合わないままであった。この議論においても、信徒が軽視されて行くことはもとより、制度的教会が軽んじられることも起こってはならない。

教説に陥ることをとどめさせる。また、聴衆をして説教を正しく判定する規範を与える。説教者は、聖書と信条に拘束され御言葉を釈義し、語る。聖書の要約としての信仰告白は、説教に神賛美としての枠組みを与え、常に新しく信仰を告白させ、教会を建てあげるという目標を鮮明にする。こうして信条は、説教による教会形成の土台を提供し、その土俵を設定する。

C 聖書・信条・教会と説教者（教会の職務）との関係

- a 教会の職務は、御言葉の務めを巡って整頓される。（使徒 6：1-4）教会は、その第一位の職務として説教者を選び、立てる。説教者は、内的召命を前提とし、外的任職を通して説教の務めを担う。ここに説教の教会的性格が明らかにされる。したがって説教において「何を」語るのかという議論は、「誰が」語るのかという考察を必須のものとする。
- b 説教者は自らの職務を、自分自身のいかなる力にも依存せず、神の全権の委託として受け入れる。したがって説教は、召された神の権威に基づき大胆に語られる。同時に、その務めを神の教会の職務として受け入れる。したがって説教者は、私信を披歴するのではなく、信仰告白（教理）に基づき聖書を釈義、黙想し、教会の言葉として公的に教会の代表として語らなければならない。

D 説教と礼拝、伝道との関係

- a 神は、福音の説教によってご自身の臨在を示し、選びの民に信仰と悔い改めを与え、礼拝する共同体、神の民の祈りの家を形成される。教会は、命なるキリストが臨在する礼拝によってその生命を更新する。教会の生命は礼拝にあり、その生命とは、キリストご自身にある。したがって、主日礼拝式は、彼との交わり的手段、つまり、恵み的手段としての説教と聖礼典に集中する構造（リタージ）となる。
- b 神の国の地上における進展、拡大こそ神の御心の中心である。したがって神は、教会を神の国の地上における中心的なあらわれとして用い、神の民に、時代を超え地域を越えすべての人々に福音を告げ知らせることを命じる。終末における教会の存在理由は、ひとえに神の国の進展に奉仕する伝

道にある。ここに説教の伝道的性格が明らかになる。したがって説教者は、すべての人々に届く言葉を獲得する修練を重ねなければならない。ここに、「誰に」という聴衆の研究と、「どのように」というコミュニケーションのためのデリバリーやレトリック等の実践的研究をも必須のものとする。

E 恵みの手段としての説教—教師による説教と信徒による説教—

召しを受け、賜物を与えられ、教育訓練を受け、任職された説教者の語る説教はもとより、信徒による説教も、神の言葉の説教、恵みの手段としての本質において、何ら変わりがない。ちなみに、日本キリスト改革派教会では、一方を説教、一方を奨励と呼ぶのは、職務による区別を明示するためである。したがって、信徒が教会の公同礼拝において、御言葉を説き明かすとき、それは、神の言葉として聴かれることを求める。そうでなければ、礼拝は成り立たないからである。また、子どもの教会（日曜学校）の礼拝説教においても同じでことが言える。ただし、任職された説教者の不在や不足等のゆえ、つまり、便宜を優先するゆえに信徒に説教を担わせることは慎重にすべきであろう。

II. 何を語るのか。 —聖書と説教と教会そして聖霊の関係—

本論に課せられた主題は、「説教において何を語るのか」であるが、それは「説教とは何か」、つまり、その本質を問うことに他ならない。余りにも大きな主題であるので、ここでは、マタイによる福音書の一節とニカイア信条と第二イス信条そしてバルメン宣言に限定し、考察することとする。

A 聖書テキスト

マタイによる福音書第 16 章 16—18 節における「聖書」と「説教」と「教会」そして「聖霊」の関係

「シモン・ペトロが、『あなたはメシア、生ける神の子です』と答えた。すると、イエスはお答えになった。『シモン・バルヨナ、あなたは幸いだ。あなたにこのことを現したのは、人間ではなく、わたしの天の父なのだ。』」

わたしも言うておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。』」（新共同訳）

神は、聖書を通して、常に信仰を問い続け、すべての人々を天国へ招き続けておられる。教会は、説教を通してこの問いに自ら答え、信仰を告白する。また、教会は、この問いを問い続けつつ、選びの民を教会へと招き続ける。こうして、教会の説教は、神の救済行為、御心実現の手段そのものとして用いられる。説教の真の語り手は、神ご自身にほかならない。

福音主義教会は、「この岩」を、後のローマ教会の監督となった「使徒ペトロ」とする「首位権の教説」を否定することにおいて一致する。一方、この岩を「12使徒団」とする者もある。改革派は、ペトロの信仰告白、ひいては「教会の信仰告白」として釈義する者が多い。ペトロの告白は、天の父からの啓示に根ざすとの主イエスの宣言に基づき、文書啓示としての「聖書」そのものとする釈義も成り立つかもしれない。しかし、「この岩」とは、「わたしがわたしの教会を建てる」と宣言なさった「キリストご自身」とする釈義こそ、より本質的な事態を示していよう。

「この岩」には、重層的な意義が込められていることも見逃せないであろう。そこで、注目すべきは、「この岩」とは、「あなたは、ペトロ」との、バルヨナ・シモンへの呼び掛けの後に宣言されている事実である。ペトロというあだ名は、はるか主イエスとの最初の出会いにおいてシモンに命名されていた。ここで、改めてシモンがペトロと呼ばれる。それは、「あなたはメシア」と信仰を見事に告白したシモンに対する命名なのである。つまり、誰でも、イエスをキリストと正しく告白した者たちは、だれもがペトラ（岩）と「される」という意味であろう。

教会は、まさに、「信仰告白者（信徒）」を土台として、主イエスによって建てあげられて行くのである。この意味で、キリスト者は誰でも、原理的に、神の言葉への応答としての説教を担う使命と賜物（天国の教えを知った学者・神学者『マタイ 13:51』）が与えられていると理解することができよう。

それを踏まえた上で、しかし、地上の教会は、神の言葉を説教する教師を信徒の中より選び、立てる。また、天国の鍵の権能を行使する役員を選び、

立てる。ここに、長老主義教会（制度的教会）の教会政治が必要とされ、成立する。ここでもまた、説教者は、教会の信仰告白（信条）に拘束されることによって、独善性や独語的過誤から守られる。また、説教の意義と目的に忠実に奉仕することへと規定される。したがって、信条を軽視もしくは無視する説教者は、教会つまり、信仰告白者である会員や役員を軽んじるばかりか、説教者本来の存在意義と目的を見失ってしまうであろう。したがって、聖書を説き明かす説教者は、そこで必ず教理（教会の信仰告白にもとづく言葉）を語ることとなるであろう。

ここで改めて、聖書と信条と教会の関係を整理する。御言葉によって御心を実現なさる神は、神の民を場とした救済史（聖書の内容）においてキリストを証言（聖書の機能）された。神は、聖書を神の言葉（聖書の本質）として教会に与え、教会の信仰と生活を規範する唯一の規範、つまり正典（聖書の権威）として、信じ認めさせた。こうして教会は、聖書（厳密に言えば、聖書とそれに対する信仰告白）を基としてその上に立ち、かつ、その権威に服する。教会は、記された神の言葉において語り続ける神によって、絶えず、信仰告白することへと促される。同時に、教会は、自らの信仰告白を信仰の規準（信条・規範される規範）として受け入れることによって、絶えず、御言葉の支配に服す。教会の職務とは、まさに、この御言葉の務めを正しく機能させることを目標に整頓される。（使徒6：1-4）

B 信条

1 ニカイア信条における「聖書」と「説教」と「教会」そして「聖霊」の関係

a 「聖書に従って三日目によみがえり」

ここで、主イエス・キリストが旧約に従って到来された約束の主でいらっしゃる、何よりもご復活が「聖書に書いてあるとおり」の事実として告白される。コリントの信徒への手紙1第15章3-4節の言葉が、そのまま、ここに引用されている。我々の信仰の営みのすべてが聖書に基づき、規範されるものであることが、この古代信条において明確に告白される。したがって教会は、この聖書の使信、福音を告知しなければならない。とりわ

け、復活の主の全権を帯びて復活の主ご自身を証することこそ教会の説教の核心となるべきことが示唆されている。

b 「聖霊は預言者を通して語りたまえり」

ここで、説教行為の主体は、聖霊なる神でいらっしゃる事が告白される。聖霊は、旧約を通して語られてきた。さらに新約を通して語り続けられておられる。したがって教会は、旧新約聖書における救済の歴史の使信の上に成り立つ。

何よりも、ここでの議論において決定的に重要かつ注目すべきは、聖霊が、預言者つまり説教者をお立てになられ、用いて来られた事実である。したがって教会は、説教者を中心にしてその職務制度を整える。それは、教会の霊的な制度であり、これらは、聖霊の豊かで自由なお働きからの逸脱などではまったくなく、聖霊の真実の実に他ならない。地上の教会は、何を基準にし、誰を説教者の務め、教職・教師に任職するのかを明らかにする。教派（教団）形成とは、その筋道を整えて、自らのアイデンティティを確立することであり、目に見える教会の神と人の前における責任である。

c 「使徒よりの、唯一の聖なる公同の教会」

地上の教会にとって決定的に重要になるのは、「使徒性」である。したがって、使徒性の解釈によって教会（教派）は、大きく規定される。

ローマ教会の首位権を否定した福音主義教会は、この使徒性（使徒的教会）を、なによりも使徒の教え、つまり「聖書」として解釈し、この教えに生きる教会として理解する。ローマ的な使徒的継承は、明確に否定される。一方で、福音主義教会が、教会の任職行為の重要性、その歴史性を否定するとき、非歴史的、非現実的な教会となり、混迷の内に、教会性を喪失するであろう。したがって、説教の本質を巡る問いは、「任職の教理」を不可欠のものとする。

前述のとおり、教会は自らの信仰告白において神と人の前に、公にする責任を自覚し、遂行するように招かれている。その最先端にして、絶えざる応答こそ、説教に他ならない。唯一の聖なる公同教会は、聖書の説き明